

(議事録)

都市想像会議

第2回「祭り×都市」

私たちは新しい祭りをデザインできるか

2015年9月24日(木) 18時30分～20時30分

ヒカリエ 8F COURT

登壇者：



左から、

伊藤香織 (東京理科大学工学部建築学科教授)

佐藤雅樹 (株式会社ヤマハミュージックジャパン 音楽の街づくりプロジェクト (おとまち) リーダー)

東浦亮典 (東急電鉄株式会社 都市創造本部 開発事業部 事業計画部 統括部長)

左京泰明 (シブヤ大学学長)

ファシリテーター



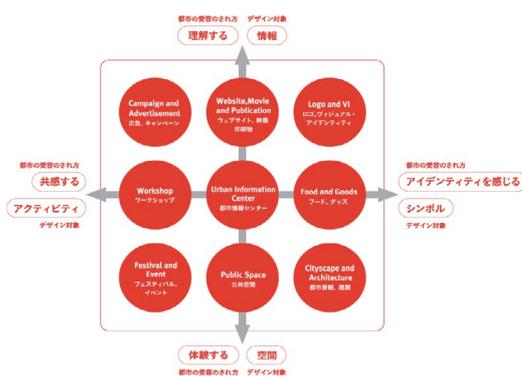
紫牟田伸子 (編集家/プロジェクトエディター/デザインプロデューサー)



紫牟田：都市想像会議は都市のことをひとつひとつ言っているというより大きく想像してまちをつくっていききたいという思いから、分断されている多様なジャンルを複合しつつ、いろいろな人と語り合いながら都市をつくっていくことを意図して開催しています。

第1回は「マイノリティ×都市」をテーマとして、現実の声を聞きながら、都市を考えていきました。

第2回は、少々不思議なタイトルかもしれませんが、「祭りと都市」を考えていきたいと思いません。祭りは、都市と人がコミュニケーションできるひとつの接点であろうと思います。祭りにもいろいろなものがあり、古い祭りもあれば新しい祭りもあります。また、いま渋谷は変わりつつあります。変化の中で、「祭り」を入口にしてまちの空間、都市の空間を考えていきたいというのが今回の会議の趣旨です。



まず初めに、この図（左）をご覧ください。これは、『シビックプライド：都市のコミュニケーションをデザインする』（宣伝会議）という本でまとめた「都市と人のコミュニケーション・ポイント」です。これはまちと人との多様な接点を整理したもので、本日お話しするのは「フェスティバル／イベント」という部分から関わる都市、という観点です。祭りは、都市の受容と空間の体験を生む接点で、ここではアクティビティをデザインするというと空間をデザインするというこ

との双方に関わっています。

今日は、登壇されるみなさんとお話を聞いていらっしゃるみなさんと一緒に、まちの空間と「まちを楽しむ」ということについて考えていきたいと思いません。

前回同様、今回も「会議」という形態をとっておりまして、聞いているみなさんも会議に参加しているという感じでお話を聞いていただき、その後、こんなふうな公共の空間を使いたいなどのご意見いただきたいと思っております。また、お帰りの際にアンケートやご意見を残し

ていただきたいと思います。

それではまず、登壇者の方々に自己紹介をお願いします。

伊藤：私は都市の研究をしています。もちろんいろいろな文献を読んだりデータを集めたりもしますが、やはり都市は見ないとわからないので、自分のトレーニングのつもりでできるだけたくさんの都市を見ようとしています。年間 20 都市を目指して頑張って見ていまして、2004 年から数え始めて、今月までに 224 都市を見ていると思います。

それから「東京ピクニッククラブ」というグループを共同主宰しています。私は都市の研究者ですが、他にいろいろなクリエイター、例えば建築家、フードコーディネーター、グラフィックデザイナー、イラストレーター、ビールの専門家、照明の専門家、カーデザイナーなどが集まっています。ピクニックを通してまちをもっと楽しくしていこうとしていまして、「ピクニック・ライト」、つまり「ピクニックする権利は都市居住者の基本的人権である」ということを主張しています。

それから、「シビックプライド研究会」というものを 2006 年からつくっていまして、2008 年に『シビックプライド：都市と人のコミュニケーションをデザインする』（宣伝会議）、この 9 月には、『シビックプライド 2 [国内編]：都市と市民のかかわりをデザインする』（宣伝会議）という本も出しました。シビックプライドというのは「まちに対する市民の誇り」のことです。郷土愛とシビックプライドとは似ていますが少し違って、シビックプライドというのは、自分自身がこの場所を良くするために関わっているという「当事者意識に基づく自負心」というふうに言えます。研究会では、「私」とまちがどう繋がっていくのか、「私」はまちで何ができるのか、あるいはまちは「私」にとって何なのか、というようなことを研究しています。

佐藤：私はヤマハミュージックジャパンという会社にいます。ヤマハミュージックジャパンは楽器メーカーヤマハ株式会社の国内販売会社で、基本は楽器の営業などが主体ですが、その中で音楽のまちづくりという取り組みをやっています。みなさんも、合唱でもピアノでもリコーダーでも、音を合わせた時に繋がる感じというのを感じた方は多いと思うんですが、音楽あるいは音を持っている「人と人を繋げる力」で、世の中がもっともっと変わっていくんじゃないかなと思っているんです。僕自身はもともとデザインの分野からスタートしまして、若い頃は焼き物を焼いたりしていました。いまは音づくり、音楽のまちづくりをしています。

東浦：東急電鉄の東浦と申します。東急沿線に住んでいたのが身近だったから入社したので、あまり鉄道と開発の仕事には興味がなく、入社面接の時には、鉄道と開発以外ならなんでもさせてください！と言ったら、鉄道と開発しかやらせてもらっていません（笑）。この春から渋谷も含めて沿線全体のマーケティングやブランディング、プロモーション、エリアマネジメントなどをやっています。

そして、走っています。健康づくりのため、美味しくお酒を飲むためでもあります。走りながら地域の資源、こんなところにこんなものがあつた！と探すのが大好きで、走ってはちょっとおもしろいものを見たら写真を撮って止まるということをやりをながらずっと続けています。また、「ロック縛りの会」という会をやっています。ロック好きの 40 代 50 代が、かなりマニアックなこの部分を聴き込もうというテーマを主催者の私が出して、みんなが CD を 3、4 枚持ち込んで、ソーシャルリスニングするという会です。もう 26、7 回続いておりまして、変なサラリーマン集団がいると新聞にも掲載されて以来、人気のイベントです。そろそろロックバーの

貸切りでは無理になってきたので、まちに出て祭りにするかという感じになってきています。

「全日本鯖連合会」という会もやっていまして、これは鯖好きのコミュニティです。鯖を中心にいろいろな料理をつくって酒を飲んで楽しむというだけではなく、沼津や福井や鳥取、八戸などの漁港とタイアップして、地域活性化イベントにまで成長してきました。

また、「ミズベリング」は、河川敷はもっと自由であるべきだということで、国土交通省の河川関係の部局が音頭を取って、民間発意から公共空間を賑わそうとしている活動ですが、私たちは二子玉川で活動をしているところです。

左京：シブヤ大学の左京です。僕は毎回ここに座らせてもらっているのですが、自己紹介は割愛させてもらって、先ほどの紫牟田さんの説明に少し補足をしたいと思います。シブヤ大学の授業は通常は講義形式が多いのですが、この授業に限っては敢えて会議形式で行っています。シブヤ大学の活動を通じてさまざまなまちの関係者の方と会っていると、舞台の表ではなく、裏の会議がすごくおもしろくて実りがあって、いろいろなアイデアに溢れているということを感じていましたので、それをどうにか表に持ってくるのができないか、あるいは普段の活動では絶対に同じ机を囲まないような多様な方々がひとつの場を囲んで意見交換をしていくことで、新しいことが生まれていくのではないかと。そして、それがこの会議の場に閉じず、実際の渋谷のこれからのまちづくりに生かされるといいのではということを考えて、敢えて会議という場を設定しています。なので、今日このテーマに対して何か答えを決めていくということではなく、どちらかというとプレスト的な場になっていくと思います。その前提でお聞きいただければと思いますし、またいろいろなアイデアが出てくるとは思います。この授業に関しては、後ほど議事録をアップして、出てきたアイデアがPDFで読めるようになりますので、メモなどはそれを前提に取っていただければいいかなと思います。

さて、渋谷のまちのイベントには新旧いろいろなものがありますが、まず「恵比寿駅前盆踊り大会」をひとつの入口に話を進めていこうと思います。参加している人たちの顔ぶれや独特の楽曲、盆踊り曲がありますので、それも注目して見ていただければと思います。今日の授業のためにわざわざ撮影をしました（笑）。



戦後間もなく“しぶや”の街の復興と再建を願って始められ、以来60年余り続きます。

「恵比寿駅前盆踊り大会」は、毎年7月末の週の金・土の2日間、恵比寿駅前のロータリーを使って行われます。主催者発表によると、毎年6万人の方が参加される大きな盆踊り大会で、今年で63回目を迎えました。

シブヤ大学は7年前からこの盆踊り大会の運営にボランティアとして携わっているという関係があります。地域の関係者から運営の担い手が少なくなってきたので、そこを手伝ってくれないかという問いかけがあったことがきっかけです。

「恵比寿新聞」という地域メディアからの引用をご紹介します（下）。

「祭も長年やっていますと**高齢化の波**が押しよせてきてまして。そもそも盆踊りとは先祖を敬い今年も元気でやってけている感謝を表すお祭りなんです。この火を絶やさずにやって行くには**若い人たちが盆踊りを楽しんでくれることが一番**だと思ったんです。」

引用: 恵比寿新聞「第四回 恵比寿な人たち 恵比寿地区町会連合会長 松下義男さん」<http://ebisufan.com/news/ebihito5.html>

盆踊り大会だけでなく地域の催事、特に古くからのコミュニティである町会や商店街に支えられている催事というのは、会への参加人数が減っていたり、高齢化によって催事の運営が難しくなってきたことが少なくありません。例えばお神輿でも地域の方だけでは支えきれなくなって、業者の方にお金を払って担いでもらっていたり、担げなくて飾っているだけになってしまっ

たりという地域もあります。そんななかで、この盆踊り大会は一体どのように運営されているのかを見ると非常に学びがあります。この盆踊り大会は、ほかの盆踊り大会と違って、若い人たちが盆踊りを楽しんでくれることをひとつの目的として開催されているというのがたいへんユニークです。



次に、これは今年の看板ですが、今年発見したんですが、盆踊り大会から「盆ダンス」という記載になっていたんですよ！（笑）

先ほどの映像でもおわかりかと思いますが、最近は外国人の方がすごく多いです。浴衣を着て参加している人の割合としては、日本の方より外国の方のほうが多いくらい。そういったことも意識されて商店街の方が「盆ダンス」という記載に変えられているんですね。

まちとの関わり方と言えば、在住者だけではなく最近は若い人たちはもちろん、恵比寿のまちで働いている方や遊びに来られる方、あるいは外国人まで含めた非常にたくさんの幅広いステークホルダーの方が参加されるお祭りになっています。

盆踊り大会の特徴を説明しますと.....盆踊り大会の特徴を説明するって何かおもしろいですが.....3つあります。ひとつは駅前のロータリーでの開催。二つ目は独自の盆踊り曲があること、そして幅広いステークホルダーが運営に参画していることです。

駅前のロータリーは普段はバスやタクシーが止まっていますが、そこを通行止めにして行われます。聞くところによると、山手線で唯一この恵比寿の盆踊り大会だけが山手線のロータリーを使って開催しているんだそうです。ちなみにテキ屋さんの類は一切なく、地域の方が警察と協力をしながら全てを管理して行っています。それができるということだけでもすごいと僕は思っています。公共空間の使い方として、日本はどちらかというと、新しいものごとはやりたくないという姿勢が各部所で働くものですがけれども、それが地域の人の力によって60数回開催されているということはすごいことだなと思っています。こういうわかりやすい場所でやっているの、駅周辺を通る会社勤めの方もみんな目にするんですよ。なんだなんだと盆踊りの

輪が広がっていくという仕組みになっています。

また、先ほどの映像の中でも最初は伝統的な盆踊りの楽曲でしたが、途中から曲調が変わりましたよね。この映像のための曲ではなくて、盆踊りの曲なんですよ。どうしたら若い人が参加してくれるか、参加しやすくなるかということで、伝統的な楽曲だけではなく新しい恵比寿オリジナルの楽曲を次々と取り入れていくんです。「恵比寿音頭」はオリジナルで、ちょうどマツケンサンバが流行った時にはサンバ風盆踊り曲「YES, YES, EBISU!」ができました。「恵比寿ラ・ヴィアン・ローズ」に至っては、元が「オー・シャンゼリゼ」というシャンソンなんです。シャンソン盆踊り（笑）。YouTubeにも上がっているの、ぜひ聞いていただけたらと思います。おおよそ聞いていただけでは盆踊りとは思えない楽曲ですが、先の映像でもみんな「フーッ！」とか声をあげていましたよね。盛り上がるので、盆踊り大会の終わりには「アンコール！」「アンコール！」ってコールが起きるんですよ（笑）。最後に「恵比寿！」って締め括られる。

紫牟田：楽しそうですね。

左京：参加者が幅広いことはお伝えしましたが、加えて地域のPTAやPTAのOBの方々が盆踊りの輪を囲んで、出店を出店されるんです。こども向けのブースを出すんですが、そこでの売り上げは、各学校に均等に配分されて教育的な活動に使われていくという仕組みになっています。

また、シブヤ大学という地域のNPOを介して新しいボランティアの方々が地域の催事の運営に関わっていく。こういったことも決してよくあることではないと思っています。古くからの地域のコミュニティが主催しているイベントには、なかなか新しい住民の方や働いている人、遊びに来る人に対して催事の運営まで開くというのは、習慣的にも考え方的にも難しいことです。楽曲もそうですが、恵比寿の商店街を中心とした主催者の方々はその辺が柔らかくて、運営のところも柔軟に取り込みながら、この恵比寿駅前盆踊り大会を運営されているというところは非常にユニークだなと思います。

イベントやフェスティバルを考えるにあたって、こういった古くからある地域の行事というものもそうだし、新しく地域に企画して立ち上げていくイベントもありますよね。いま地域のコミュニティはどうあるべきか、どのように、誰が運営していくかということも、この祭りのテーマにあると思います。

紫牟田：長い年月盆踊り大会をやり続け、さらにそれに工夫を重ねて継続していく。そこが神事とは違うお祭りたる所以で、時代と共に変わる祭りという部分があるということですね。

左京：そうですね。それが恵比寿盆踊り大会を、あれだけの賑わいを持たせてユニークなものにしている理由だと思うんです。松下さんという代表はご高齢ですけど、こういう新しい発想ができて、柔軟に変化できるということは、なかなかできることではないなと思っています。みんなでつくっているという側面もそうですし、やはり優れたリーダーシップというものもあるなと思います。

紫牟田：恵比寿は伝統的なお祭りを都市空間に集まる人に合わせて変えているという感じがするけれども、伊藤さんはいろいろなところをご覧になっていて、祭りのあり方をどうお考えですか。

伊藤：いいなと思うのは、普段のまちと同じ場所が全然違う姿になって、それを体験すると見慣れた場所がまた違って見えたり、普段言葉を交わしたことのなかった人との関係が変わっていくとかいうことですね。お祭りはいわば“消えもの”なんですけど、普段知っているロータリーがこんなふうになるのだという見え方も含めて、空間や人や関係が変わっていく、というのがいいですね。

地縁型コミュニティとテーマ型コミュニティという言葉で言えば、近年、地縁型とテーマ型の中間形態のような、地域に関係しているけれども共通する興味を持っている人たちが関わってこられるような枠組みが重要になってきていると思いますが、それを非常にうまくやられているなというように思います。

地縁型というと典型的なのは自治会。逆にテーマ型コミュニティだと、何々が好きな人のような集まりで、インターネットで集まれるから空間に関係はないんですね。このお祭りは空間に関係しつつも、こういうことに興味があるとかおもしろそうと思った人たちが集まってきているので、その融合型みたいなものかなと。最近はそのようなものが大事だと言われてきているので、それを非常に上手な人たちで実現されているなと思いました。

紫牟田：東浦さんはいかがですか？テーマ型コミュニティをなかったところにつくられているというご経験があるかと思いますが。

東浦：恵比寿の盆踊りはすごいぞと前から聞いていましたが、左京さんからお話を聞くまではそういう仕掛けがあるとは気がついていませんでした。恵比寿の人たちだけではなく、代官山の人たちも結構参加していますよね。代官山にもお祭りはあるんですが、あまり代官山は地に根づいた大きなお祭りがなくて、地元の人たちも心のお祭りは恵比寿だ、という感じで恵比寿に行っていますよね。

僕が知っている限りでも自由が丘も盛り上がる例大祭のお神輿もあって、外国人だけが担げる国際神輿があったりします。下北沢でも「下北沢音頭」を去年からつくっています。下北沢の場合は半分かなり本格的なプロの目が入っていますが、みんなで下北沢音頭を踊っています。僕は下北沢の人間ではありませんが混じれた感じがありました。普通の盆踊りや例大祭などは地域の神社などを中心とした小さなコミュニティの深いお祭りであることが多いので、見ることはあってもなかなか参加するハードルは高い。恵比寿の盆踊りは参加しやすい雰囲気づくりをされているなという感じがしますね。

紫牟田：駅前という空間の使い方もいいのでしょうかね。参加しやすく、誰もが当事者になれるですね。



伊藤：都市空間を使うという例で持ってきた写真がふたつあります。ひとつは岸和田の「だんじり」です。都市空間を非常に上手に使っていますね。例えばこれは交差点ですが、クランク状の交差点になっていて狭いんですよ。でもこういうところや坂道が見せ場だったりします。広い道では異なる動きをしたり、ここはゆっくり進む、夜はこうやるといった、見せ方と参加の仕方がとてもよ



くデザインされているなどと思って感心しています。八尾の「おわら風の盆」では道にぼんぼりが出ますが、根元を見ると差し込めるように道路や側溝に穴が開けられているんです。そういうしつらえがインフラとして普段から祭りに備えているんです。空間の話ですね。

紫牟田：祭りには空間に加えてもうひとつ、時間のデザインがあるのではないのでしょうか。岸和田のだんじりもそうですが、お祭りを軸に人々の一年間がスケジュール化されています。祭りが生活の一部になることによって生活の時間がデザインされるというのが、素敵だなと思います。それが可視化されているのが、「風の盆」のしつらえなのではないのでしょうか。

佐藤：恵比寿の盆踊りは私も何回か前を通って見入ったりしたことがあったと改めて思い出したんですが、あの場所は盆踊りの場所なんだな、と残像で見ている感じがしました。すごくいいスペース感だなと。65年前にスタートする前はどうかだったのかなと思ったりしました。



イタリアのシエナというまちは、まちの真ん中の広場が祭り用にしつらえてあります。ここにもいくつかお祭りがありますよね。一番大きなのは競馬のお祭りで、広場に木っ端を敷き詰めてすごいお祭りをやります。僕もシエナのまちを見に行っていたことがあって、そういう残像がたくさんある感じですが年に1回の祭りなのかもしれません、残像として吸引力となっているのだろうなど、いま改めて思います。

伊藤さんがおっしゃったようにインフラが整備されていて、この祭りのときは何かを差し込むというようなことが、長い歴史の中で用意されているのが、カッコいいなと思ったんです。恵比寿の映像を見て、それに近いものがあるなと感じましたね。

伊藤：シエナのカンポ広場は、広場としても非常に優れていますね。私は画像でしか見たことしかありませんが、お祭りがあると、周囲の建物の窓が客席にしか見えなくなったり、真ん中の貝殻のかたちの灰色の分かれているところに対して、周りは走るためにあるんだなと見える。そう思うと恵比寿のロータリーも盆踊りのための場所だなというふうに見えてきちゃったりするんですね（笑）。

佐藤：カンポ広場は「世界一素晴らしいリビング」と言われていて、何かあるとみんなここに来るんですね。カフェに寄ったり、広場の真ん中で物思いにふける少年がいるとおじいさんが声をかけたりして、とても温かい場所です。周りのカフェがすべて広場に向いているので、お酒やコーヒーを飲んだりできる、とても素敵な公園だと思います。住居や商店街が広場の中心から放射状に展開をしている。イタリアの歴史はそれぞれの地域が独立した歴史を持っているので、こういった場所は戦に出て行くときにここから出て行く、戦から帰ってきたときはここで迎えるというように使われていたと思いますし、そういうものを含めた祭りというのが脈々

とあるのかなと思います。

このまちがいいなと思ったもうひとつは、まちの若い人たちがまちのことをすごく大切に思っていて、ゴミも率先して拾っていくようなことがあって、きれいなまちにしておこうとみんなが思っているというところでしたね。

観光客はまずここにきますけれども、住んでいる人たちやたくさんの人たちが、何かあるとここに集まってくるというのが、温かい場所になっているのかなと私は思います。

紫牟田：音楽を軸に新しいお祭りとして昨年からはじめられた「渋谷ズンチャカ！」は、カンポ広場に触発されたところもあるとうかがっていますが。

佐藤：若いときにこのシエナのまちに行かせてもらったんですね。すごく印象が強くて、こういうまちがくれたらいいだろうなという思いがあって、いま「おとまち」というものをさせてもらっています。



「渋谷ズンチャカ！」は、渋谷でこれから何か始めたいけれどいいアイデアはない？という話を前渋谷区長から頂戴しました。最初はジャズフェスとか、よくほかの地域でもやっているような音楽祭のイメージの議論が先行したので、渋谷でやるならもっと違うものがきっとできるはずだと思って、左京さんにまず相談をかけたんです。そのときのイメージは、ホールやライブハウスを使わず、渋谷のまちなかでみんなが楽しんでいく

というようなことが、少しずつでもできていったらいいだろうなと思ったんです。シエナのイメージも少し思い描きながら、こんな広場がこれから渋谷のまちなかにできていったら素敵かなと思って……。



去年イベントで0（ゼロ）回目をやりまして、今年が1回です。今年は、これを進められている「チーム・ズンチャカ！」という面々がいらっしゃって、できるだけたくさんの人に参加してほしいということで、彼らが一生懸命これをつくっています。今年は彼らの発案で、パレードをしようという話になりまして、「いいぞ、これはおもしろいね」と。今見ていただいているのはパレードの映像です。みなさんのなかに参加された方もいらっしゃるかもしれません。

参加された方いますか？ ああ、いらっしいますね。桜丘のインフォスタワーからスタートして、まちなかを下っていったんですが、なんと国道 246 を止めた。映像でもそのことを区長が話しています。区長自らズンチャカ T シャツを着ていますね。

紫牟田：そして、みやしたこうえんでは、さまざまな方々が演奏をされましたね。



佐藤：公園内には、誰でも気軽に参加できる、シェアをして参加できるいろいろなワークショップがありました。プロのみなさんが一生懸命表現して伝えるという音楽もありますが、みんなが参加できる音楽もあるということを中心に据えて進めているイベントなんです。

例えばパーカッションをたくさん準備しておいて、そこに来たらパーカッションで参加できるドラムサークルという企画や、歌で参加できるもの、なかにはカラオケもあつたりしますし、普段はバンドに属していないけれども楽器さえ持ってくれば演奏参加できるという企画もあります。最後は参加したみなさんでフィナーレを迎えるというストーリーになっています。今年は去年よりも1時間長くなりまして、暗くなってきて祭りの気分も少し出てきて、フィナーレでひとつになって盛り上がっていました。

紫牟田：どのくらいの方が参加されたのでしょうか。

佐藤：昨年のプレイベントには5,000人。今年は12,000人の参加と実行委員ではカウントしています。

左京：このイベントの主催は「渋谷ズンチャカ実行委員会」で、エリアでいえば、渋谷駅周辺の駅から四方に延びる商店街組合の方々が実行委員会を形成して、そこに渋谷区が共催で入って行われているイベントです。おとまちチームとシブヤ大学は、その実働部隊として企画運営に携わっているという体制です。特におとまちチームは、市民音楽祭はもちろん音楽のコンテンツのプロとしても役割を果たしていますし、先ほどでてきた「チーム・ズンチャカ！」は有志によるボランティアのチームです。シブヤ大学はこのボランティアチームのマネジメントやアドバイスの業務を行っています。

少し補足説明すると、まちを使った通常の音楽イベントは、まちにステージがあつて、プロのミュージシャンがそこに来て、一般のまちの方々は聴衆になることが多いと思います。一方この音楽イベントの特徴は「参加型」といっていて、僕らは舞台まではつくる、だけどそこに上るのはプロのミュージシャンだけでなく、誰でもステージに上がっていける、歌でも楽器でも、ひとりでもバンドでもセッションでもいい、というまちを舞台化するようなイベントです。

先ほどはシエナのお話もありましたが、パリ市が行っている「音楽の日」というイベントがありまして、毎年夏至の日に行われている音楽の日も参考にしています。「音楽の日」はその1日だけパリ市のライブハウス、広場や道路や公共空間、空き店舗などを含めて、どこでも誰でも音楽を奏でていいというイベントです。それを聞いたときに、それはすごく素敵なイベントだし、いつか渋谷のまちでもやってみたいという気持ちを僕ら自身も持っていたものですから、佐藤さんから話があつたときに、渋谷のまちでもそういったイベントをやっていきましょうという話になっていったという経緯があります。

公共空間の使い方というのは、非常にピンポイントなイベントのテーマだと思っていて、パリ市ではそういうように広場や道路を使える。例えば公園もそうですが公共空間は、なかなか自

由に使うということが今や難しい仕組みになっています。どちらかといえば、何々をやっちゃいけないというルールが多いくらい。もちろん歩道もそうですよね。ストリートミュージシャンは基本的に排除されるというのが普通になってしまっていますが、一時的にイベント、フェスティバルという枠を取ることで公共空間を市民の手に解放する。そういった実験としての側面も「渋谷ズンチャカ！」にはあります。なので、いまは宮下公園や渋谷のまちの一部にステージを組んで行っていますけれど、いつかはステージがないところでも自由に市民が音楽を奏でる日として「渋谷ズンチャカ！」がなっていくことをひとつの理想としています。

佐藤：東浦さんにうかがいたいのですが、工事現場が渋谷のまちに増えていくと、仮囲いがどんどんできていきますよね。まちが進化していくために必要なことだと思いますが、時には仮囲いもステージにしておこうというのはどうでしょう。安全面や規制の問題はあるでしょうが、仮囲いの中はいつも工事しているわけではないかもしれないので、仮囲いの門を時には開いて、そこもステージにしたらいいいよね、なんていう議論も当時は渋谷のみなさんともしていたんです。そんなこともこういう機会にみんなで議論していくと、もしかしたらできちゃうかもしれないと思うんですね。

東浦：「渋谷ズンチャカ！」に弊社も協賛させていただいて、私もこの春から渋谷を担当することになったので見に行きました。音楽性でいうと何でもあり、ゆるい感じでいい雰囲気だなと思いましたね。渋谷には「渋谷音楽祭」という今年で10回目の大きな音楽イベントがあって、まちのあちらこちらで、プロやセミプロが、公共の場で大会社を前に聴かせるという感じで盛況なんですけど、「渋谷ズンチャカ！」は手ぶらで行っても楽しめる感じでしたよね。公共空間の使い方へのひとつの投げかけとしておもしろい取り組みだなと思っています。

これから2027年まで渋谷のどこかで工事をしているんですが、あまりに渋谷の工事期間が長いので、工事期間中からエリアマネジメントをやろうということで準備をされていて、いまは道路占用の規制緩和などの申請協議をやっています。今日、長谷部区長とたまたま打ち合わせをしてからここに来ましたが、区長が民間企業以上の柔軟な発想とスピード感でこれやりましょよ！あれやりましょよ！早くやりましょよ！とおっしゃるので、できそうな気がしてきました。11月から社会実験と称して、工事をしているエリアの広告物条例の規制緩和を受けて、広告やイベントをしたりと始まります。来年の「渋谷ズンチャカ！」くらいには、もしかしたら工事区域で……なんていうことがあるかもしれないですね。みなさんが見えていない地下空間もかなり掘り進んでいて、防災上も安全なまちにしようとやっていますが、まだ共用化していない地下空間でなにか起こすこともあるのかもしれないし、可能性はいろいろありますね。

紫牟田：まちをみんなの空間として使いこなすというのがこれからのテーマですね。公共空間は一方的にお上がつくっているものではなく、私たちのものであるというのが、これからの考え方だと思います。「渋谷ズンチャカ！」を見ていたら、自分たちの空間を取り戻していくという感覚を感じます。道の真ん中でパレードができたらいいなと思いましたね。

佐藤：そうですね。音楽というとホールや室内で演奏することはよく体験する。いろいろコントロールしやすいし、クレームも押さえやすいということもあるかもしれませんが。でも外でやる音楽はすごくいいんですよね。音楽の聴こえ方も変わる。伊藤さんのお話で、ピクニックというテーマがありましたけれど、外で食べるおにぎりってすごく美味しいですよ！ 屋外の

カフェで飲むビールもコーヒーも美味しい。屋外の文化を渋谷から発信していくというのがすごくいいのではないかなと思います。

紫牟田：かつては路上でバンド活動をしている人たちが原宿辺りにたくさんいましたよね。そういう人たちが許容されるまちであるといいなと思うのですが、伊藤さんはいかがですか。

伊藤：そうですね。原宿のホコ天は残念ながらなくなりましたが、やはりそこから文化を発信していましたし、どれくらいひとりひとりが自覚的だったのかわかりませんが、自分は都市文化の一端を担っているという、ある種の自負みたいなものを持っていたのではないかと思います。昔の映像を見ていたらロカビリーのグループのリーダーが「俺ら、このまちをつくっている自負があるんで」って実際に言っていたんですよ。きっとそうなんだと思うんですよ。先ほど紫牟田さんもおっしゃっていましたが、まちは誰かがつくってくれて、そこを私たちはその範囲の中で使わせていただきますという場所ではなくて、本来は自分たちで使いこなして使い倒していかなくてはいけないし、つくっていかなくちゃいけない。それは権利でもあるけれども面倒くさくもあるわけですよ。どういうふうにもこのまちをしていきたいのか、意見の違う人たちがたくさんいて、そういう人たちと空間自体を共有しているわけですよ。じゃあどう共有していくのか。車と人もそうですし、音楽がうるさいという人もいたりする。そこでエリアマネジメントというものが出てくるとは思うんですが、自分たちでもっとこうしたいし、自分たちでまちをつくってきたいからこそ、じゃあ一緒にマネジメントを考えようじゃないですか、というように繋がっていくんだと思います。

ピクニックに関しては、最初は公園が全然使われていないなと思って、「東京ピクニッククラブ」というものを始めたのですが、見ていくうちに、空間も不自由ですがユーザーも不自由だなと思ったんですね。

これ（右）は横浜で行った「PICNOPOLIS」というイベントです。まちがもっと楽しくなったり、まちが自分の生活に馴染んできたりすることに関しては、意外と他人任せの人が多いなと思います。でもそれではとてももったいない。だったらピクニックを流行らせるのが早いかなと思ってピクニックもやっています。



東浦：流行ってきているの？

伊藤：流行ってきていますよ。絶対にそうです！（笑）

佐藤：今日は少し提案をしておきたいんです。ヘルシンキの写真がありましてね（下）。これはヘルシンキのまちなかの公園です。ちょうどクリスマスのマルシェの時期の写真ですが、真ん中に見える白い建物、これがリハーサルハウスというか公園の中にあるオープンになるライブ空間です。行った時期は冬だったので気温が-15度とかで、写真の中にスピーカーがありますが、スピーカーだと思ったらストーブだった！（笑）



ここはどういう使われ方をしているのかというと、大きなオペラハウスのリハーサル告知などとして使っているんです。多くの人たちの目に止まることなので、公園であることが必須なんです。音は漏れてもいい。扉を開いて外に向かっても使える。左にちょっと段になっているのが座席ですが、30人ほど入る規模ですから、演劇やオペラの一場面をリハーサルするというようなことをやっていました。これは渋谷でもできるのではないかなと思うんですね。仮設でもいいくらいで、工事現場を転々としてもいいくらいのもものがまちなかにあったら、もっと渋谷の音楽が日常になっていくし、このヒカリエ・ホールとの連携も非常に取りやすい。日本ではまず渋谷にこれをつくりたいなという夢を見ているんですよ。

紫牟田：音楽が漏れ出して、まちの一部になりますね。

佐藤：そうですね。告知もしているので、これなら週末うちのおばあさんと行こうかとかいって行く人たちがいる。芸術をもっと外に出していいと思います。これをまちのインフラにできないかな。はす向かいにはもっと歴史の古いオープンカフェがあって、そこでも同じような機能を持っていると聞きました。

紫牟田：いいですね。楽しみの前段階にも楽しみがあるということですね。ワクワクがしつらえてある。また、見ると同時に中からも外が見えるという透明性というのは都市が見え、都市の中にあるという関連性があることが大切だと思うんです。

伊藤さんとご一緒したバルセロナでは、まちの一部の道路が祝祭空間のようにしつらえてありました。日常の中にある祝祭空間というか、そこにちゃんと小さな小屋がしつらえられていたり、ここには立ってパントマイムしていいよとかいうところがあったりして、お祭りや楽しみのレベルというのはいろいろある気がしていて、盆踊りのような年に1回やるからすごく爆発的におもしろいというようなものもあれば、週末ごとに楽しめるからとか、毎日誰か何かをやっているみたいだ、というようなのもあっていろいろですね。伊藤さんはいろいろご覧になっていると思うので、紹介していただけませんか？



伊藤：ちょうどその「毎週やったり...」というお話でいえば、これ（左）は南フランスのモンペリエです。夏になると毎週金曜日の夕方から食のフェスティバルをやっています、5ユーロくらいでワイン3杯券とグラスがついてきます。さまざまな生産者が出ていて、ワイン券で好みのワインを試すことができます。人数が多ければボトルで買っている人もいます。料理もたくさんの屋台が出て、テリーヌやムール貝や海老があってとても美味しそうです。広場に椅子とテーブル



"Place des Terreaux" by troistoques (time-out) (CC BY-NC)



ルが並んでいますが、それだけでは足りないので、ピクニック状態にもなっていたりするんですね。南仏なので、夏を存分に楽しもうという人たちでいっぱいです。音楽にも食にも参加性があり、場をつくり出し、人と人をつなぐ、非常によい媒体になりますね。

これ（左）はフランスのリヨンです。先ほどののは夏の夕方でしたが、これは冬の夜ですね。日本と違ってヨーロッパは緯度が高く夜が長いので、それを逆手にとって利用している。もともとは各家庭が窓辺に光を灯すというキリスト教に由来しているお祭りでしたが、それを「フェテ・ド・リュミエール」という光のフェスティバルに変えたものです。いろいろなアーティストを招いたり、参加性のあるものも含めて、光の作品がまちに点在しています。

紫牟田：この光の祭りは、もともとは小さな灯をともし風習から生まれていますよね。

伊藤：そうなんです。まさにそれを新しい祭りにデザインしたということですね。広場や市役所、水辺を使って光のアート作品の展示や光のパフォーミングアートなどをやっていて、それを見ながら夜通しみんながまち中を歩かまわるんです。道も地下鉄も光のアートになったりします。これ（左2点）は赤い車両、緑の車両といった感じですね。そうするとまちを巡ることが楽しくなるし、冬の寒くて暗い夜というのがとても楽しみになる。こんな活かし方もあるねという感じで

すね。

アビニヨンの演劇祭（右）はとても有名な演劇祭です。このあたりではオフと言われる小劇場での自主上演がたくさん開催されています。期間は3週間くらいだと思いますけれども、オフも含めてあらゆるところで演劇をやっている。まち中ポスターで溢れていて、まち中にいろいろな格好をした人たちがいて、自分たちの演劇の宣伝パフォーマンスのほか、路上にもいろいろなパフォーマンスをする人が溢れています。もともとは劇場のなかでやる公式なお祭りですが、じゃあまちのなかでも使っちゃおうという感じで、どんどんまちに広がっていくという広がり方が素晴らしいなと思いますね。



これ（次頁）はフランスのナントという都市を拠点とする「ロワイヤル・ド・リュクス」というカンパニーです。まさにまちを舞台に、巨大な操り人形と4日間の物語を紡いでいます。下は2006年のロンドン公演の「スルタン象」という演目で、可愛い女の子と象が出てきます。



“Sultan’s Elephant” by David (CC BY)



“Gigantic Girl” by Andreas Georghiou (CC BY-NC)

象は水を吹くので、まわりの人は傘をさしています。女の子は公園で眠ったり水浴びをしたり、まちのいろいろな場所の特性を読んで物語を紡いでいき、物語を埋め込んでいくんですね。象も女の子も重機を使った操り人形で、たくさんの人が乗って引っ張って操るんです。さっきお祭りを経るとまちが変わって見えるということを言いましたが、ここでもそれが起こります。みなさん、これを人形だと思いますか。でもこれは人形ではなくて生きているんです。この公演に参加してしまうと、私たちは巨人の世界を生きるようになる。観客が彼女を生かしているのだと思いますが、次はいつ来てくれるのかな、いまはどこを旅しているのかなとか思うようになる。私は彼らの公演を2回くらい実際に見ていますが、彼女は生きているし、そのまちの物語になっていて、このまちは巨人の時間を生きているまちだということに思い始めるんですね。共同幻想と言えるかもしれません。

2009年のベルリン公演では、象でなく、男の巨人が歩く。巨大な男の人が西ベルリン、彼女が東ベルリンを象徴して、二人が出会うという

話です。まちの物語が展開します。去年のナント公演では、おばあさんと黒人の男の子が歩きました。ベルリンでもナントでも、窓から見物していたり、木に登って見たり、バス停や信号機に登って見たり、あらゆるところが客席になります。開催期間は4日間。人形は大きいので誰でもどこでも見られるし、一緒に歩いていったりして同じ時間を生きるんですね。精度が高いというのもありますし、パフォーマンスとしても素晴らしいし、まちの使い方をかなり活かしているのだからこそ人形たちが生きてくるし、一緒に生きられるのかなと思いますね。

紫牟田：ナントというまちが「ロワイヤル・ド・リュクス」という才能を内包していることが素晴らしいですね。

東浦：ヨーロッパの事例は勉強になるなと思う反面、日本と比較してはいけないのかもしれませんが、しつらえ空間の違いや楽しむセンスの違いなどいろいろありますね。でもやはりみなさんもこんな空間・こんな場所に行ってみたいなと思うのでしょうか？ 思うけれど、これがどういう仕組みでまわっているかのほうが僕は知りたいですね。でかい人形を持ってくればいいんだとかいうことではない。文脈の解き方やマネジメントの仕方とか資金はどうしているのかとか。

紫牟田：渋谷でやるなら、って考える必要があるのかな、と思いますけれども。ヨーロッパでどうだからそれをまた持ってこようというような考え方が私たちはだんだんなくなってきてい

る。音楽の日、すごく素敵だね、じゃあ渋谷ではどうしようってなって、「渋谷ズンチャカ！」ができていくという文脈づくりですよ。246を止めたのもナントと同じかもしれませんね。

東浦：はぐらかされた気がする！（笑） 日々いろいろな現実と戦っているのですね。これから渋谷はどうなるかという、駅周辺だけの話ですが、ヒカリエから覗いてもらうとわかりますが、すごい大工事をやっています。それが一番ノッポの渋谷駅街区と書いてあるところの開発です。ここが全部でき上がるのは2027年です。この一番高いビルは高さ230mあって、東京オリンピックまでにはなんとか間に合わせようとしています。2019年度末くらいにはできる



でしょう。このビルでは屋上がおもしろくて、ここに日本で最大級の屋上展望台をつくるように設計を変更しました。ここをどう使っていくかは我々の知恵次第。佐藤さん、またいろいろ企みましょうね。

それから、この周囲にもいろいろビルができます。足元の人で賑わっているところ辺りが現在のハチ公広場です。いまよりもっと広い空間になります。渋谷はすり鉢状の地形になっているので、それを逆手にとって建物を建て

ながら、縦動線と横動線をつなぎ合わせようとしています。その結果何層かにわたって広場空間ができあがりまして、13箇所ですべて合計3ヘクタールくらいあります。こうした新しくできる空間でエリアマネジメント組織が中心になりながら、まちや行政、警察など協力し合っているいろいろな祝祭空間をつくっていけるのではないかと思います。



これ（上）が今ハチ公前のスクランブル交差点からヒカリエや東急百貨店の方を見た図です。慣れていないのでまだ渋谷らしくないようにも見えますが、屋上展望台はあの上にあるわけです。この下の空間は現在、複雑怪奇な構造になっている渋谷のまちをなるべくスムーズにわかりやすくユニバーサルに動いていける空間になっていくということですね。



紫牟田：渋谷たくさんイベントがあって、お祭りみたいなまちでもありますよね。左京さんは渋谷というまちのお祭りということで考えていくと、どんなビジョンや考え方を持っていますか？ 都市計画を見てしまうと、どうしても建物に目がいってしまいますし、広場は通路のように考えが

ちになってしまいますけれど、ここで音楽ができるかとか、ダンスとか、そういうソフト的なことからここに入っていきたいのですが。

左京：大規模な開発の宿命だとは思いますが、特に採算性だとか機能性が重視されて設計されていくと思います。そこをどうそのまち固有の文化やそういったものを育む仕組みをうまく結びつけていけるか、定量化できず目に見えないけれどもそこにある文化をどう育む仕掛けをハードとソフトを含めインフラ化していくか、そういったことを折り込んだ開発をしていくかということがすごく重要なことだと思います。

特に渋谷のアイデンティティは、“文化”というより“カルチャー”といったほうがわかりやすいかもしれないですが、特に若い人たちを中心とした創造性、そのカルチャーが渋谷のまちのコアアイデンティティだと僕は思っています。そういう人たちに対して、この駅の開発はどうあるべきか。その創造性を引きつけ、あるいは開かせていくためにこの開発はどうあればよいか、ということ念頭に少し考えてみる。それは採算性や機能性とはまた違うことかもしれないけれど、渋谷のまちづくりとしては非常に重要な点ではないかと思っています。

東浦：全く僕もそう思っています。実はこの4月から渋谷に関わっているので僕が企画したわけではなんです（笑）。来たらこうなっていたというような状況なので、ここからまさにソフトやエアーマネジメント的なことをやれということで悩んでいるわけなんです。エアーマネジメント団体もできたばかりで、まだ何も活動は始まっていません。全部企業主導型でやるというより、まちやNPOなどの団体をだんだん巻き込みながら公共空間の使い方を考えていこうでしょう。

渋谷の魅力は路地やサブカルチャー、ストリートカルチャーというところにもあるので、これをどう使うかということ、これを俯瞰していただいて、ただまわりの部分をどうしていくかということについては常に次の考え方にいって渋谷の良さを出していきたいと思っています。10月8日に渋谷区の主催で、我々も企画・協力してやっているシンポジウムが行われます。まちづくりではなく「かも」づくり」と書いてあります。つまり、「**Making Maybe.**」。これだけの大資本が大きなハードをつくってしまうと、一般の市井の方からするととても取り付くシマがないというか、参加していいかどうかわからないという感じになりますけれど、まちはいろいろな人のものだし、市民だけではなく来街者や事業者がまちづくりに自分の思いをかけて関わったほうがいいし、関わられるんだということ共有したいと、「私ならこんなことができる“かも”」をたくさん集めようというようなフューチャーセッションを予定しています。俺はこれが言いたい！自分の“かも”を実現したい！ということがあったら、我々は全て拾い上げて、3ヶ年計画でまわりのソフトの事業などに実現するネタにしていこうと思っています。

佐藤：駅前完成図の人がいっぱいいるところの五角形はイベント広場ですか。

東浦：たぶんそうでしょう（笑）。あまりディテールを突っ込まれると……（笑）。

佐藤：桜丘のほうにも「賑わい広場」のようなイベントを想定した広場がこれからできるような議論がされています。

最後に、私からの議論のきっかけとして、金王八幡宮の写真を持ってきました。渋谷のまちは、古くは海だったそうですね。金王八幡宮がある辺りに渋谷氏の渋谷城というお城があって、こ

こは案外渋谷のヘソだなあと思うんです。きっとここは渋谷の心があるひとつの場所なんだろうと思うんです。ビルもたくさん建って、経済がどんどん発展してくのはとても大事なんですけど、こういう場所も残っていくので、そんなバランスの中で、例えばお祭りをやる時はここで祭りの原点みたいなものを行うなどということもできるまちなんだなと思います。

金王八幡宮だけではなく、宮下公園の先には御嶽神社もありますよね。古い歴史をちゃんと持ちながら新しいものがどんどんできているまちというところで使えよう……使うと言うと神社に申し訳ないけれど、ちゃんと主役になってもらうというようなことができていくとすごく素敵なまちになっていくし、またそういう場所をお祭りで使わせていただくということもありますよね。もともと明治神宮もそういうふう発展してきたと先ほど左京さんが教えてくれました。そんなふうにとどんどん発展していけたらいいなと思います。



東浦：金王八幡宮さんは「吉本芸人かたつむり奉納ライブ」なんて書いてありますけれども(笑)、実は結構開いていますよね。伝統的なものだけでなく、新しいこともやっている。ここには青い目の神主さんもいらして国際性もあるし、ヒカリエで「TED×TOKYO」というイベントをやったときの打ち上げはこの金王八幡宮さんでやらせていただいたりもしましたので、我々が距離を感じているだけで、実は飛び込んでいくと意外と受けとめていただけるのかもしれないなと思いますけれどね。

紫牟田：現代には、イベントと、フェスティバルもものすごく多いですよ。商業的なイベントもすごく多いし、一方的で伝統的な行事もある。非常にたくさんのものであって、先ほど伊藤さんはイベントは消えものだと言っていましたけど、消えものとある意味祭りとして私たちが何か心を入れていくというような、そういうデザインのありかたというのが、祭りと都市を考えたときに大事だろうなと思うんですが、いかがでしょう。私たちは都市空間と祭りの関係というものを、これから何を一番のキモとして考えていくべきなのでしょう。佐藤さんがカンポ広場は「素晴らしいリビング」と言われているとおっしゃっていましたよね。それを聞いて、「ああ、そういうことか！」と思ったところがあって、みんなが自分の家としてまちを考えていくと伊藤さんもよくおっしゃっているけれども、何かそういうものが祭り自体に表れてくるということをうまくデザインするということが大事なのかなと思いましたね。と言って、振るのはちょっと乱暴かと思うけど。(笑)

佐藤：そういうものがハードウェアもソフトも積み上がっていくとみんなが自慢したくなるまちになっていきますよね。「自慢したくなるまち」ってすごくいいですよ。僕たちは渋谷を持っているんだということが言えるまちを目指していくことがいいなと思いますね。

東浦：最近まちづくりで成功していると言われているポートランドを去年も見してきました。ポートランドの、特にダウントウンは小さなまちですが、小さい祝祭イベントが毎週のように行われていました。それぞれきちんと運営されていて、みんなが楽しめる。もちろん観光客も楽しめるし、地元の人になにより楽しんでる感じです。こんなことがまちに標準的に備わって

いるとすごく素晴らしいなと思いました。

「自慢できるまち」とおっしゃいましたが、御宮さんを中心とした伝統的なお祭りは排他的になりがちで、どんどん高齢化や過疎化でできなくなってということもあるから、外の人を呼んできたり、イベント的に広げていくこともあると思いますが、ひとつ突き抜けて、あそこのまちのあの祭りってすごいよねとなると、見られる側の人たちの意識が急に変わるんだろうなと思っています。高円寺の阿波踊りは長く続けながら創意工夫をしてあれだけのものになった。やはり突き抜けるとすごいことが起きるなと思いますよね。

紫牟田：そろそろ時間も少なくなってきました。私は先ほどの「素晴らしいリビング」というお話と、窓が客席になるという伊藤さんのお話で、見る人と見られるものの関係がまちの仕組みによって随分変わってくるんだと強く思いました。盆踊りというのは真ん中が上がっているかたちで求心性があるものなのだから、カンポ広場もすり鉢状だから向こうまで見通せてワクワクしたりとか、そういう空間のデザインのあり方もまちを総合的に考えるとあるのだなと思いました。渋谷もそういう地形があると東浦さんもおっしゃっていたので、それも活かしながら公共的な部分のハードのデザインとソフトを一体として考えたいと思いました。

少し時間が押してしまってあと15分くらいしかありませんが、みなさんのなかで、この話は会議にかけたいとか疑問とか、なにかありましたらぜひ、お願いします。

質問1：すごくおもしろい会議でした、ありがとうございます。僕はタップダンスをやっていて、2年前に会社を辞めて、タップダンスの活動を本格的に開始しているんですが、自分が表現する立場に立って初めて、イベントを立ち上げるということは難しいことだなと思っています。路上でやったりするのも難しいですし、イベントをやるのも難しい。でもお話をきいたなかでまち全体でなにかをやるということが大事だなと思っていて、そうなったときにどういう切り口、どういうところから入っていったらいいのだろうということが知りたいと思うんです。市役所や区役所に直接行くのか、企業を通していったほうがいいのか、なにかヒントといえますかこうしていくのがいいのではないかなという意見などがあれば聞きたいなと思います。

佐藤：大事な話だと思います。フランスだとまちの美学・美意識に関わるキュレーターのような人がいます。建築はハードとしてまちの美学に携わっている人が、日本の場合は建築家として存在しているのだけれど。ヨーロッパだとソフトよりの建築家の立場の人がいるんですよ。日本でもアートマネジメント議論が始まっています。渋谷のまちで先駆的なかたちで取り組んでいけたら、と思います。それこそ長谷部区長にもお願いをして、まちの美意識、美学を決めていく人がコーディネーターになればいろいろなものができていくということだと思います。その反面、勝手にやるとなるとなかなか難しい。「やってはダメ」みたいになるものをポジティブにどう考えていくかということが本当に大事なポイントだなと思いますね。

東浦：すごくいい質問ですね。やはりみんなそこが聞きたいですよ。素敵な絵だけ見せられてもこれってどうやるんだろうということが悩ましい。我々は企業なので、あの手この手を使いますが、個人として表現したいときはどうするのかというのがあります。郊外のたまプラーザのまちの再生をやるなかで、やはり市民参加を訴えて、住民創発プロジェクトというのをやったときに、きたひとりの主婦がまちなかパフォーマンスをやりたいという熱い思いで、い

ろいろみんなを巻き込みながら、口説きながら、障害にぶつかりながらもやって、大変な大成功をして今3年目を迎えているということがあります。この活動はすごく参考になるかなと思います。

ただ場所を貸してくれというのではなく、そのまちが好きだ、このまちの一員になりたい、関わりたいという思いで、町会長でも商店街の会長でもいいからまちのキーパーソンに飛び込んでいって、まずはまちの課題のお手伝いみたいなどころからやって、信用されるというところからやるのがいいんじゃないかなと思いますけれどね。

紫牟田：シブヤ大学的にも道筋としての生涯学習というか、いろいろな講座とかそういうものつくっていて、それも窓口になるかなと聞きながら思ったんですけどね。いきなり自分でやるのは、ハードルは確かに高いですね。でも渋谷はいろいろな人がまちかどで踊っていたり実はして、それが許容できるまちになっていくのが理想かなという気はするんですね。

左京：それは非常に課題だと思っています。渋谷だけでなく、それがちゃんとできているところは日本では少ない。つまり公共空間を“誰がマネジメントするのか”といったときに、その多くは行政だったり、町会や自治会といった地域のコミュニティは非常にわかりづらいですよ。その集まりにどう関わっていき、誰が許可してくれて使えるようになるのかという道筋が非常にわかりにくい。

ざっくり言えば、行政もしくはその地域の古くからの地域団体・地域コミュニティのどちらかが許可、ないし主体的に取り組めば、その公共空間を使うことができるというのが今の日本の実情かと思います。なので、いまのところそういったアプローチになっていくわけですが、でも、ここで発言していただいたひとりのタップダンサーの他にもたくさんそういう人がいる。その人たちの思いや、そこをどうまちとして受け入れてそれを具現化して、それがまたまちの魅力や文化となっていくかということが、いま僕らが解いていかなければいけない課題なんだろうと思います。公共空間のマネジメントというのは、今の行政や企業だけではできないかもしれない。その連合体や違うNPOのプレイヤーも入ったかたちでそれをやっていかななくてはいけない。それは、いま日本全体の課題なのではないかと思っています。

パブリックマネジメントのなかにパークマネジメントという分野があって、日本では多くが行政が運営しているところが多いと思います。しかし、有名なところではニューヨークのマンハッタンではほとんどの公共空間や公園が、NPOなどの手によって「コンセッション方式」と呼ばれる手によって運営されていることがよく知られています。行政から一定の収益事業の許可を受ける代わりに、行政に代わって公的なサービスを行っていく。行政は市民の声を聞く、仮にプロであったとしても、その解決策を講じていくような企画のプロではない場合もあるわけですから、そこに民間の柔軟な発想を持った企画のプロたちが参画をして、市民の声をうまく拾いながら、企画を講じていくという、先ほど佐藤さんがおっしゃったキュレーター的な役割も含めて公共空間もマネジメントができる新しいプレイヤーや仕組みは、いま渋谷だけでなくどこでも求められていることだと思います。

紫牟田：「水都大阪パートナーズ」は、水辺をどう使うかということに関して間に入る役目を追っています。やりたい人と空間をつなげる中間的な役割が必要ですね。私たちも渋谷でできたらいいですね。

質問2：必ずしも祭りイベントやフェスティバルとは一緒ではないと思います。今日は敢えて「祭り×都市」という祭りを切り口に問題提起されていると思って参加しました。アートやファッションなどのイベントや音楽イベントは、数としてはかなり多く行われていると思うんです。いまお話があったように難しい反面、一方でやろうと思えば気軽にできちゃう環境はあると思っていて、その単位が10人とか20人とか100人とか、その単位の規模感さえ自分なりに考えてしまえば、ある程度はやりやすいと思います。

しかし、先ほどおっしゃった恵比寿の盆踊りのような祭りというものになりえるような、祭りが持っている良さであったり、祭りが持っているものとは何なのかなというのを伺いたいたいと思いました。

佐藤：「渋谷ズンチャカ！」も祭りといえるようになっていかないといけないなと私思います。金王八幡宮の話は、多くの人たちが共感できることも祭りに発展させていくポイントなのかなと思っているからなんです。自分たちだけが楽しければいいというものから、まちのためにとかみんなのためにとか渋谷が好きで来てくれる人たちのためにとか、そういうようなことも含めて考えていくということなのかなと今の時点では思っています。

東浦：私もずっと思っていたことを質問してくれておもしろいなと思ったんですが、ヨーロッパの都市では祭りとかフェスティバルが一般の人に広く認知されている。日本のイベントと祭りの違いは、どれだけ日常になるかというところかなと思っています。イベントが日常にならない限りは、なかなか祭りというものにはならないのではないかと。

質問3：おそらく日常というのは、何か共通できるものがあってできていくのじゃないでしょうか。例えば盆踊り自体は前からやっている歴史的な部分などのコンテキストがあるから日常化していくのかなと思います。だから、現代だからこそ、どういったコンテキストを見出して、イベント化していくのが祭りになり得るのでしょうか。例えば音楽とか参加型だとか、誰でもできるとかITだよとか、いまこの時代だからこそこういう祭りがあり得るよねという部分の切り口みたいところで、何かヒントはないでしょうか。

佐藤：私もそこは考えていかななくてはいけないところだと思っています。先ほどたくさんヨーロッパの祭りを見ましたが、ワールドカップも祭りかもしれませんし、F1も祭りといえるかもしれません。多くのヨーロッパの祭りは、多民族国家故の祭りだという人がいますね。多民族国家故の課題があって、その背景として祭りというものが歴史的に成立してきているとおっしゃる方もいます。そうすると日本のなかの祭りはどう発展していくのかというのは、まちや人々の有り様にも変わってくるのかなと思うんですけれども。

東浦：いまの会話を聞いていて用意していたパワポがひとつの参考になるかなと思います。これは島村菜津さんの『スローシティ』という本から引用してきたものですが、スローシティではなくても自分らしい愛着の持てるまちと考えたときに使えるなと思ってメモしていたものです。「没場所性を克服」していくこと、それがシビックプライドにつながっていくと思います。都市も人も豊かに幸せになるというための没場所性を克服するキーワードが8つありまして、その5つ目に「どうせやるならあつと驚く奇抜なイベントを」という項目があって、僕もそう思っています。もちろん日常になればそれはそれでいいけれども、先ほどのような大きな人形

は絶対日常ではないですよ。ああいうものの「なんじゃこりゃ」というものが普通に行われる許容力・包容力がそのまちの魅力だし、こういう都市的なところでは奇抜なものをどう日常的にするかということが重要なのかな、と私は思っています。

伊藤：祭りの定義を言い始めると結構大変そうなのですが、ひとつ考えていることがあります。イベントが消費になってしまうとまさに消えもので終わってしまうと思うんですね。「今日はこれをやっているからこれに参加して楽しかった！じゃあ次！」みたいなのが、消費だと思っています。

いますごく多くのイベントがありますが、消費が多いと思うんですね。誰かがお膳立てしてくれたものを消費しに行く。それだとそこで終わってしまう。ピクニックをなぜやっているかという、参加者の日常の振る舞いが変わっていくきっかけにしたいから。まちはこういう使い方ができて、そこには自分にもできることがある、自分がこう工夫するとまちはこんなふうになる、という体験を通して、「うちの前の空き地はつまらない空き地だと思っていたけど、こう使ってみたら私の都市生活が全然変わってくるんじゃないか。じゃあ、今度の日曜日には、こうやって過ごしてみよう」というように、なんというか、それを体験することによって振る舞いが変わってくる、あるいは心持ちが変わってくる。出来事自体は一過性ですが、単なる消費に終わらないものを目指していくべきかなと思います。それを祭りと呼ぶかどうかは、ちょっと別として、ですが。

質問2：ありがとうございます。

紫牟田：都市は劇場だと80年代によく言われていたことを少し思い出しながら聞いていました。最近、それはちょっと違うんじゃないかということを感じます。劇場だと言っていたときには、消費をした上で「見る／見られる」という関係性がすごく強かった気がしていたのですが、現代の都市の劇場性というものを見直してみると、昔パウル・クレーという画家が都市と劇場を対比して考えていたことを思い出しました。日常的な都市があるからこそ劇場に行くこと非日常があり、非日常があるからこそまた都市に創造力が生まれるとクレーはいうんですね。劇場があるということが創造力をうむひとつの“装置”になっているということを感じています。

「祭り」というものもある意味で、創造力を醸成するようなもので、気持ちが新しくなったり、その一瞬が次の1年の糧になるなどか、そういうところにまで昇華されるとそれはあなたにとっての祭りだったり、都市にとっての祭りになると言えるのかもしれない。祭りは実は、人の創造力のためにあるんじゃないかということを感じました。

発言されなかった方がどう思ったかのご意見もすごく聞きたいなと思っています。みなさんもこの会議に参加していただいているひとりですから、思ったことや考えたこと、提案でもいいです、今後の私たちのまちづくりに活かしていけるようなものになればいいなと思いますので、ぜひアンケートに書いてお帰りいただけたらと思います。今日はどうもありがとうございました。